



敬老会でのアトラクション（加茂南小学校特設音楽クラブ）  
9月15日

主な内容

- 小池市長市政報告……………20
  - ・ 県央2次医療圏における救命救急センター併設病院について……………29
  - ・ 加茂市長の県知事への要望書……………1017
- 総体の結果……………21
- 加茂川水生生物調査……………2223
- 加茂の風土記……………24

# 市政報告



加茂市長

小池 清彦

## 県央の救命救急センター付き の病院の建設について

県央に救命救急センターを併設する病院を建設することについて、三条市長の誘いで三条、燕、田上、弥彦の四市町村長が去る八月二十九日（金）、抜き打ち的に、泉田知事さんに要望書を提出し、燕三条駅の近くに六百床の病院をつくるべきことを提案いたしました。

た。

この要望書はまた、この病院の建設と同時に、県央の病院の再編・統廃合を行い、さらにこの病院については、公設民営も十分に視野に入れることを提案しています。

これに対し、私、加茂市長も、直ちに九月二日（火）泉田知事さんに要望書を提出し、次のことを申し述べました。

(1) 四市町村長の提案は、加茂病院と吉田病院を廃止することを意味するものであり、同意できない。

(2) 加茂市がすでに提案している三条市との境に近い加茂市内の土地に、加茂病院の移転改築と兼ねて、この

病院を建設するのが最良の方策である。

(3) 燕三条駅の近くの猛烈に地価の高い場所に巨大な病院を作ることは、巨額の費用を必要とし、実現不可能なことである。

(4) 一方、加茂市が最適地として提案している場所は、燕三条駅にも近く、県央各地から短時間で到達できる場所であり、加茂病院の改築を兼ねることができるので財政上、一挙両得で、費用対効果が極めて大きい。

(5) このたびの件のポイントは、二十床の救命救急センターを併設する病

院をつくるというだけのことであつて、六百床の病院をつくることではなく、三百床で足りるものである。ただし、県に財政的余裕があまりであれば、三百五十床でも四百床でも四百五十床でも、それ以上いくらか大きくともよい。現に病院の少ない下越二次医療圏でさえ、救命救急センターを併設する新発田病院は、四百五十八床（救命救急センターの分を合わせると四百七十八床）である。

(6) 加茂市が最適地として提案している候補地は、地価の安い場所であり、十町歩でもいくらでも、加茂市が無償で提供する。



(7) 県央二次医療圏においては、病院の再編・統廃合を行う必要はないので、これを行わないこと。

(8) 救命救急センターの建設の問題に、県立病院の民営化を絡めないこと。

県立病院の使命は、県民の安心と安全のために、採算の合わない医療部門を担うことにある。

地方公営企業の経理については、特殊な方式が定められており、病院会計の赤字と称するものは、それと同額の貯金、すなわち損益勘定留保資金でカバーされており、実際は赤字ではない。

県立病院の民営化は、不採算部門を切り捨てることにつながり、また、

病院の存続が簡単に停止されるおそれがあるので、慎重を期すべきことであり、軽々に行うべきではない。

(9) かなりの数の県立病院を民営化して、これを次々に厚生連、すなわち新潟県厚生農業協同組合連合会に経営させることは、危険である。厚生連は、農協をバックとする団体であって、昨今の農業の置かれている厳しい状況を考えれば、厚生連がたくさんの病院を今後長期にわたり、経営していくるか疑問である。

以上が私の要望書の骨子であります。この件につきまして、それまでの経緯とその後の経過を含め、さらに申し

上げますと、

一・県央二次医療圏における救命救急センター併設病院につきましては、本年三月ころから内々に泉田知事さんと、加茂、三条、燕の三市長で話し合ってきたところでありますが、まだ相談の初めの段階であり、候補地を特定するような段階ではなく、既存の病院をつぶすとか、民営化するとかいうようなことを決めてかかるような段階ではなかったのであります。

そうこうしているうちに加茂病院の医師の数が極端に減らされていることが判明し、県にだまされていたことが分かったので、私から知事さ

んに、「まず加茂病院の充実が先でしょう。加茂病院をこんな状態にしておいて、救命救急センター併設病院のことを相談するのは論外の話です」と申し上げ、知事さんも、「そうですね。この話し合いは、しばらく中止しましょう」とおっしゃって中止となっていたのでした。

それなのに、話し合いの中止の合間に三条の市長さんが、三人の市町村長さんを誘って、燕三条駅の近くに六百床の病院をつくれという要望書を知事さんに提出するという、真珠湾の奇襲攻撃みたいなものを仕掛けてきたので、私も、直ちに応戦した次第であります。

二．一つの医療圏における各病院の病床数の合計は、厚生労働省の基準で決められております。県央の定められた病床数は、二千九十七床で、現在六十床の余裕があります。

一方、加茂病院の病床数は、百八十床であります。これに救命救急センターの二十床と県央の余裕の六十床を加えると、二百六十床になります。四十床くらいの基準のオーバーは、許されることであります。現に新潟二次医療圏の現実の病床数は、一万二百五十九床あり、これは基準を三千六百五十八床も大幅にオーバーしています。

したがって、私は、加茂病院の移転改築を兼ねて、三百床の救命救急

センター併設の病院をつくることが最良の策であると考えます。

この場合、三百床の燕労災病院を廃止してこの分を取り込み、病床数を六百床にするというのであれば、加茂病院を六百床にすればよく、それでも構いませんが、これは、県に莫大な財政負担を強いることになります。

燕労災病院は、国すなわち厚生労働省がつくっている病院であり、国立病院に準ずるものであって、国という強固なバックを持った、立派な病院であります。したがって、国すなわち厚生労働省が新潟県に、上越市と燕市にある二つの労災病院のうち、燕市の方を廃止したいという意

向を持っているとしても、それを受け入れることは得策でなく、知事も市町村長も、地元国会議員も、県議会議員も一丸となつて、この立派な病院の存続を勝ちとることが最も大切なことであると考えます。

実際は、厚生労働省は、燕労災病院を廃止する考えは全くなく、逆にこれを存続させるべきであると強く主張しているとのことであります。

三・八月二十九日(金)に四市町村長の要望書が突然知事さんに提出されたので、私は、直ちに知事あての要望書を作成し、泉田知事さんに面会を申し入れました。知事さんは、九月九日でないとうしても会えないと

いうことであり、それ以前なら代わりに神保副知事が受け取ってもよいですかとのことでありましたので、私は、結構ですと答え、九月二日(火)に神保副知事さんに要望書を提出して御説明いたしました。

このとき、神保副知事は、「知事さんは、小池市長さんに、この件の協議に参加されるよう伝えてくれとおっしゃいました」と言われますので、私は、「当然参加しますが、条件が二つあります。一つは、あまり関係のない人の委員会みたいな回りくどいものを作るのではなく、知事と五市町村長のトップ同士の協議にするのと。もう一つは、加茂市が提案している場所を候補地の中に入れること

です」と答えたところであります。

四・翌日九月三日(水)に知事さんから電話がかかってまいりまして、「あなたの要望書は拝見いたしました。加茂病院を廃止したり縮小したりすることはいたしません。加茂病院を民営化することともいたしません。今後とも県立でいきます」とおっしゃいました。加茂病院につきましては、これまで知事さんは、いろいろなお考えを持たれたことがあるのですが、知事さんがここで腹を決めて決断されたことに対し、高く評価したいと思います。

なお、知事さんは、私におっしゃったことを文書にして、報道機関に

配られました。

しかし、油断は禁物です。加茂病院は、そろそろ建て替えの時期に来ております。建て替えてもらえなければ、加茂病院は、なくなってしまう。加茂市民一丸となって頑張る必要があります。

五・この九月三日(水)の知事さんから電話では、知事さんは、さらに「まずもって、知事と五市町村長とで、フリーな話し合いをしたい」とおっしゃいました。この会合は、知事選後の十月下旬に開かれる予定になっております。



以下に、次の文書を掲げます。

○加茂市長の県知事への要望書

○三条・燕・田上・弥彦の四市町村長の県知事への要望書

○三条市長等の中核病院設置要望に関する知事コメント

【 加茂市長の県知事への要望書 】

健 第 1532 号

平成20年9月2日

新潟県知事 泉 田 裕 彦 様

加茂市長 小 池 清 彦

県央2次医療圏における救命救急センター併設病院について（要望）

去る8月29日（金）、三条市長、燕市長、田上町長及び弥彦村長から、貴台に  
対し、

- (1) 県央第二次保健医療圏の中心部に位置する燕三条駅・三条燕インターチェンジ周辺に、救命救急センター機能を併設する病床数600床相当規模の中核病院を設置すること。
- (2) 上記(1)の中核病院の設置に要する許可病床数を確保するにあたっては、県央二次保健医療圏内の病院の再編も検討に入れること。
- (3) 上記(2)の再編にあたっては、周辺地域住民に対する通院外来機能等の医療サービス提供機能の保持等に配慮し、中核病院のサテライト化（再編等で整理縮小された病院が中核病院と同じ運営主体によって運営されることをいう。）といった手法の活用を検討すること。
- (4) 中核病院の設置運営については、公設公営に捉われるのではなく、公設民営といった手法も十分視野に入れること。

との4項目を要望する要望書が提出されました。

しかし、

- 1 他の2次医療圏同様、定められた基準病床数に、ほとんど余裕のない県央2次医療圏において、忽然として、新たに600床もの新しい病院を作るということは、県立加茂病院と県立吉田病院を廃止ないしは実質廃止することを意味

しているのであり、そのような案は、到底加茂市と燕市が同意できるものではなく、実現不可能な案であります。現に4市町村長の要望書の論旨からすれば、加茂病院と吉田病院はサテライト化されるのであり、この要望書は、サテライト化とは、「再編等で整理縮小された病院が中核病院と同じ運営主体によって運営されることをいう。」と明確に述べているのであります。即ち、加茂病院と吉田病院を整理縮小して、診療所にするということであります。

2 燕市長さんも、この要望に名を連ねておられ、吉田病院を公設民営化すれば、それで吉田病院は残せるとっておられるのかかもしれませんが、定められた県央2次医療圏の基準病床数には、公営・民営の区別はありませんので、そのようにしても、吉田病院を存続させることは不可能であります。

3 サテライト病院として、加茂病院と吉田病院を存続させることは、そもそも不可能であります。なぜならば、要望された病院の600床から加茂病院の180床と吉田病院の302床の併せて482床を差し引くと118床が残るのみとなり、このことは、加茂病院と吉田病院を廃止せずにこの病院を作ることは、不可能であることを示しています。4市町村長の要望書では、三条にある厚生連三条総合病院の病床数199床に新たに401床を加えて、新たな600床の厚生連三条総合病院を作るということを考えておられるようですが、この案は、加茂病院と吉田病院を廃止ないしは実質廃止して、診療所同然のものにする以外に実現不可能な案であります。上記1で述べたように、4市町村長の要望書は、むしろこのことを明言しているのであります。

4 このたび県央2次医療圏と魚沼2次医療圏で起こっている出来事は、もとはといえば、20床の救命救急センターを作り、その背後に300床程度以上の病院を置くというだけの話なのであります。しかるに、この件に、病院の再編や県立病院の民営化を絡めてお考えになるので、いつまでたっても話がまとまらないのだと思います。十日町病院関連のことも同様だと思います。

5 今から10年前の平成10年4月の新潟県の県立病院の医師数の合計は、375人でありました。これに対して、今年即ち平成20年4月の県立病院の医師数の合計は、396人で、21人も増えております。即ち、新潟県は、こ

うした面から見れば、必ずしも医師不足ではありません。大きな病院に必要以上に医師が集まりすぎているということだとも言えるのであります。

6 従って「現在、新潟県は医師不足だから、東京から医師を連れてくるため新幹線の燕三条駅に隣接して、救命救急センターを併設する病院を作らなければならない」ということには、必ずしもなりません。現に新発田病院と上越中央病院は、新幹線からは、極めて遠い所にあるのに、新発田病院には76人、上越中央病院には87人という十分な数あるいはそれ以上の大勢の医師が勤務しているのであります。

7 新幹線の燕三条駅に隣接した場所に救命救急センターを併設する病院を作るのでなければ、医師が来ないという考え方は、正しくありません。

私が最適地として提案している加茂市内の候補地は、燕三条駅から車で5分そこそこで到達できる距離にあります。この時間は、新潟駅からがんセンターまでの時間と同じくらいであり、新潟駅から新潟市民病院までの時間より短いと思います。

8 救命救急センターが建設された場合、県央のあらゆる地域から30分以内に到達できることが理想となります。この場合重要なのは、北陸自動車道ではなく、国道403号線のバイパスであります。救命救急センターが作られることになれば、国道403号線バイパスの整備は、国・県の最重要課題となり、一気に完成します。

9 私が最適地として提案している加茂市内の候補地は、この国道403号線のバイパス沿いにあります。また、三条市との境に隣接しており、国道403号線のバイパスが一気に完成した場合には、三条市役所からこの候補地までは、救急車で5分程度で到達できるものと思います。

10 平成13年に小泉内閣が出現して以来、日本海側の県と市町村は、地方交付税を驚くほど大幅に減らされ、新潟県の財政も極めて厳しい状況にあります。そうした状況の中で、県は、魚沼に救命救急センターを併設する病院を作り、県央に同様の病院を作り、また、十日町病院の問題を抱えておられます。しかも、県民の安心と安全を確保するためには、これらを短期間で実現していかな



ければなりません。そのためには、できるだけ経費をかけないことが絶対条件であります。このような状況の中で、燕三条駅に隣接した地価の猛烈に高いところに、莫大な土地購入費を払って、しかも、600床という巨大な病院を作ることは、不可能なことであります。

- 11 他方において、私が最適地として提案している候補地は、地価の安い場所で、しかも10町歩でもいくらでも、加茂市が無償で提供するのであります。
- 12 さらに、この件のポイントは、20床の救命救急センターを併設する病院を作るというだけのことであって、600床の病院を作ることではないのであります。20床の救命救急センターを併設する病院としては、300床で足りるのであります。さらに県に財政的余裕がおりであれば350床でも400床でも450床でもよいと思います。病院の数の少ない下越2次医療圏でさえ、救命救急センターを併設する新発田病院は、458床なのであります。
- 13 県立加茂病院は、建て替えの時期に来ておりますので、県立加茂病院を移転改築して救命救急センターを併設することにすれば、県の財政としては一挙兩得で、きわめて費用対効果が高いことになります。
- 14 私が最適地として提案している場所に、加茂病院を移転改築して救命救急センターを併設して、300床の病院（状況により350床、400床、あるいは450床とする）とすることにすれば、吉田病院は、廃止する必要がなくなります。県央に存在する200床前後のいくつかの病院も廃止の嵐に巻き込まれずに済みます。しかも最低の費用で目的を達成することができます。

以上に鑑み、私は下記のとおり強く御要望申し上げます。

#### 記

- 1 新たに600床の病院を建設することは、加茂病院と吉田病院を廃止ないしは実質廃止することであり、そんなことをする必要は全く無く、かつ、実現不可能なことである。また、燕三条駅の近くの猛烈に地価の高い場所に巨

大な病院を作るとは、巨額の費用を必要とし、実現不可能なことである。

一方、加茂市が最適地として提案している場所は、燕三条駅にも近く、県央各地から短時間で到達できる場所であり、加茂病院の改築を兼ねることができるので、財政上一挙両得で、費用対効果が極めて大きい。

従って、実現可能な最良の方策として、加茂市が最適地として提案している場所に県立加茂病院を移転改築し、現在の180床に120床を追加して、救命救急センターを併設する300床の病院を作ること。この病院は、状況により、350床、400床あるいは450床にすることもありうるが、無理のない線に落ちつけること。

- 2 この病院の土地は、加茂市が無償で提供すること。
- 3 県央2次医療圏においては、病院の再編・統廃合を行う必要はないので、これを行わないこと。
- 4 救命救急センターの建設の問題に、県立病院の民営化をからめないこと。
- 5 県立病院の使命は、県民の安心と安全のために、採算の合わない医療部門を担うことにあり、県立病院は、県政における最重要事項である。従って、県の一般会計から必要な支出を行うことは、極めて大切なことである。また、いわゆる地方公営企業の経理については、特殊な方式が定められており、病院会計の赤字と称するものは、それと同額の貯金即ち損益勘定留保資金でカバーされており、実際は赤字ではない。県立病院の民営化は、不採算部門を切り捨てることにつながり、また、病院の存続が簡単に停止されるおそれがあるので、慎重を期すべきことであり、軽々に行うべきではない。
- 6 特に、かなりの数の県立病院を民営化して、これを次々に厚生連即ち新潟県厚生農業協同組合連合会に経営させることは、県民にとっても、厚生連にとっても、危険であると思われる。厚生連は、農協をバックとする団体であって、設置目的の主体は農家の健康維持にある。また、昨今の農業が置かれている厳しい状況を考えれば、たくさんの病院を今後長期にわたり、経営し

て行けるのか疑問である。

- 7 4市町村長の要望書は、燕労災病院が廃止の方向にあるとの一つの判断を前提としているように思われる。燕労災病院の病床数は300床である。この300床に厚生連三条総合病院の199床を加えて、499床の公設民営の病院を作ることを骨子としているように思われる。

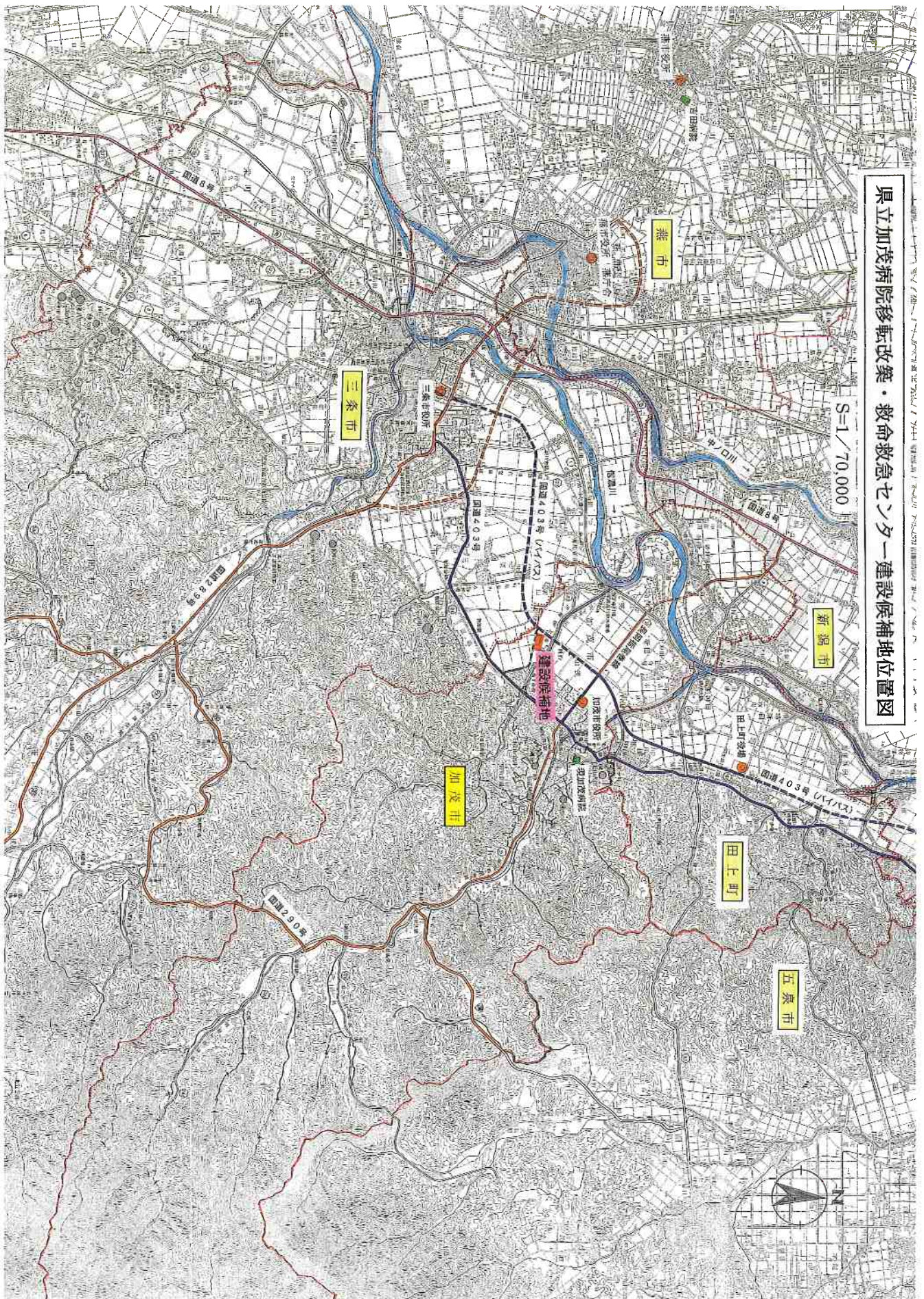
この案は500床ないしそれ以上の大きな病院を新たに建設することになる上に、燕三条駅の近隣に建設するということで、莫大な土地代がかかり、全体として途方もない費用がかかるものであり、県の財政状況からみて不可能に近いものである。

それならば、燕労災病院の300床に加茂病院の180床を加えて480床とし、加茂病院の建て替えと兼ねて、燕三条駅から5分そこそこで到達できる加茂市提案の候補地に、病院を建てる方が、県としては土地代が要らないこともあり、容易に実現可能な最良の案であると考ええる。



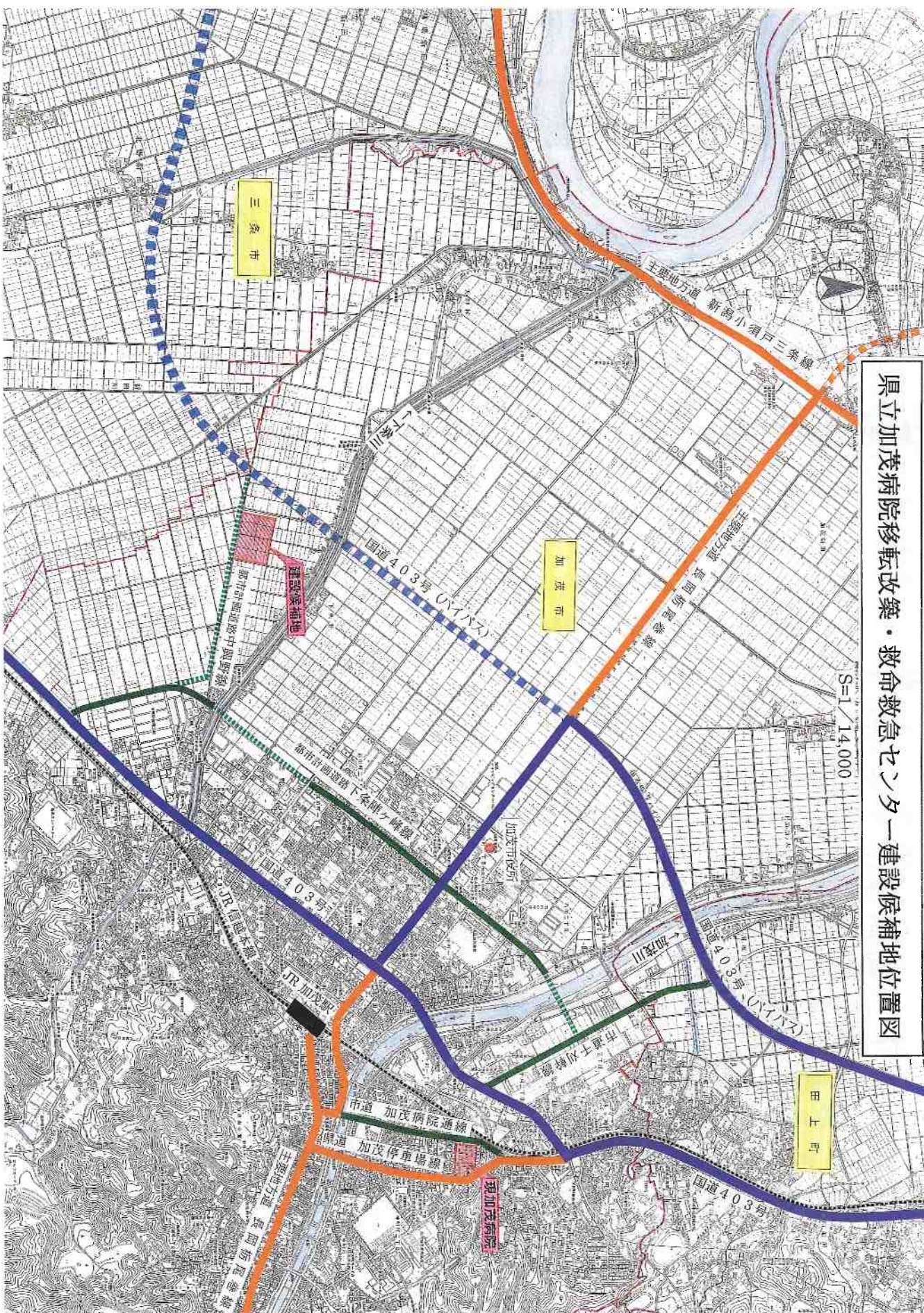
県立加茂病院移転改築・救命救急センター建設候補地位置図

S=1/70,000





県立加茂病院移転改築・救命救急センター建設候補地位置図





県央地域における中核病院及び救命救急センターの設置についての要望書

三条市・燕市・田上町・弥彦村

---

平成20年8月29日

新潟県知事 泉田裕彦 様

三条市長 國定勇人  
燕 市長 小林 清  
田上町長 佐藤邦義  
弥彦村長 大谷良孝

---

県央地域における中核病院及び救命救急センターの設置についての要望書

現在、県央二次医療圏において救急搬送される患者の数は年々増加しているため、圏域内での受入先の確保が困難な場合があり、やむなく他圏域の医療機関へ搬送する例が多くなってきているところである。

平成19年救急患者搬送先医療機関調査によれば、県央二次保健医療圏の救急搬送のうち約23%が新潟や長岡といった圏域外の病院に搬送されており、他圏域に比べて突出した圏域外搬送率となっている。

一刻を争う重篤な患者を相当の時間を要する他圏域へ搬送せざるを得ない現在の状態は、万一の際に生死にかかわる重大事であり、是非とも改善しなければならない。

また、県央二次保健医療圏は、病床数200床から300床程度の病院が数多く存立しているのが特徴である。

これまでは、各病院の経営者及び医療従事者の粉骨砕身の努力も相まって、上述の医療環境の中、安定的な医療サービスの提供が維持されてきたところであるが、近年、勤務医及び看護師の減少などといった医療環境の変化があるにもかかわらず、仮に、今後、何ら

かの手立てを講じないまま推移していけば、県央二次保健医療圏における安定的な医療サービス提供機能の維持が困難な状況となる可能性があることは、県央4医師会によって構成されている「県央地域の救急医療の在り方に関する検討会」における議論からも自明である。

こうした県央二次保健医療圏における救命救急体制の脆弱性及び医療サービス提供機能維持の困難性を鑑みた場合、県央地域において、一日も早く、救命救急センター機能を併設する中核病院を設置する必要があることは論を待たないところである。

しかしながら、中核病院を新設するには、県央二次保健医療圏における許可病床数の確保、新設される中核病院の運営体制、既設病院の今後の在り方、新設される中核病院と既設病院との運営体制をはじめとする役割分担の整理といった諸課題を解決しなければならないこともまた事実である。

そこで、我々、県央二次保健医療圏に位置する4市町村長は、これまで、複数の医療関係者とも協議を重ねながら、本件に係る打開策を検討してきた。

下記に示す基本的な提言は、4市町村長間において検討した結果であり、新潟県においては、本提言を尊重しつつ、新潟県の力強い主導の下、地域住民の合意形成を図る中で、一日も早く、県央地域において、救命救急センター機能を併設する中核病院を設置するために尽力されることを強く要望するものである。

## 記

- 1 県央二次保健医療圏の中心部に位置する燕三条駅・三条燕インターチェンジ周辺に、救命救急センター機能を併設する病床数600床相当規模の中核病院を設置すること。
- 2 上記1の中核病院の設置に要する許可病床数を確保するにあたっては、県央二次保健医療圏内の病院の再編も検討に入れること。
- 3 上記2の再編にあたっては、周辺地域住民に対する通院外来機能等の医療サービス提供機能の保持等に配慮し、中核病院のサテライト化（再編等で整理縮小された病院が中核病院と同じ運営主体によって運営されることをいう。）といった手法の活用を検討すること。
- 4 中核病院の設置運営については、公設公営に捉われるのではなく、公設民営といった手法も十分視野に入れること。

新潟県報道資料



新潟県

平成20年9月5日

病院局業務課

三条市長等の中核病院設置要望に関する知事コメント

去る8月29日に、三条市長、燕市長、田上町長及び弥彦村長から中核病院設置に関する要望がありましたが、これに関して県として加茂病院の廃止や縮小等は考えておりません。

注 報道機関に配布されたこの文書は、「加茂病院の廃止や縮小等は考えておりません」というものですが、知事さんは私に、「民営化もしない。今後とも県立でいく」とおっしゃいました。このことは、「等」という言葉で示されているものと考えております。



# 総体結果



## 硬式テニス (シングルス)

期日 九月七日

会場 市営庭球場(駒岡)

※男子Cクラスと女子Bクラスはエントリー数が少ないため他クラスと一緒に行われました。

【男子】▼Aクラス①瀧澤智弘(加茂高)②牛腸実(グレイト)③山本潔(フリー)▼Bクラス①鈴木雄也(加茂高)②渡邊恒(KIT)③志田利弥(加茂高)

【女子】▼Aクラス①中山佐和子(シテイサークル)②中島美和子(加茂ローン)③大桃さおり(加茂テニス)▼Cクラス①羽賀富士子(まつたり)②中名林純子(同)③小柳美恵(同)



## 空手道

期日 九月十三日

会場 勤労者体育センター

※選手の所属は(スポーツ少年団)です。

【形】▼小学生無級者男女混合①山川琳子②牛腸慎也③唐木沢光、金井悠馬▼小学生低学年男子①弥久保竜



## ソフトテニス

期日 九月十四日

会場 市営庭球場(駒岡)

治②伊丹駿③宮口拡、山川大智▼小学生低学年女子①岡美羽②堀内静波③船久保穂香、斎藤柊南▼小学生高学年男子①堀内海真②番場誠人③弥久保亮太、長谷川知輝▼小学生高学年女子①山川真子②樋口天海③山川麗香、船久保遥▼中学生男子①田中悠斗②廣川拓臣③松井涼輔、本間勇輝▼中学生女子①五十嵐落②川又優③成田鮎子、小林莉乃

【組手】▼小学生低学年男子①宮口拡②平林丈宜③山川大智、弥久保竜治▼小学生低学年女子①成瀬桃香②堀内静波③斎藤柊南、船久保穂香▼小学生高学年男子①樋口陽児②弥久保亮太③長谷川知輝、森山理喜▼小学生高学年女子①船久保遥②石附雪菜③堀美理、田中紅里▼中学生男子①田中悠斗②笹川遊③木下雄介、西潟巧太郎▼中学生女子①五十嵐落②樋口夏季③川又優

【女子】▼小学生Aの部①真木田優衣・坂田恵(加茂小・下条小)②星野由衣・福島美月(石川小・加茂小)③滝沢有梨・渡邊唯(下条小・加茂小)



## 卓球

期日 九月十四日

会場 下条体育センター

小)▼小学生Bの部①滝沢有梨・岡琴李(下条小・加茂西小)②渡辺朱音・泉田莉奈(七谷小)③坂田恵・前山愛(下条小・加茂小)▼中学生の部①泉田舞・前山知香(加茂中)②佐藤千秋・坂上楓佳(加茂中)③泉田遥・田下仁香子(加茂中)、小武内美咲・小池みゆき(加茂中)▼一般の部①高橋麻実・桑原麻美(三条東高)②番場彩乃・志田稀耶(三条東高・新津南高)③渡辺詩織・石塚京子(三条東高・協会)

【個人戦】▼中学男子①知野竜平(加茂中)②水越悠介(葵中)③野村大輔(葵中)、横尾秀幸(葵中)▼高校一般男子①松沢和彦(加茂卓球ク)②番場正人(加茂卓球ク)③桑原貫(加茂中)、細野修司(三条商高教)

▼高校一般女子①小野倫子(若宮中教)②鈴木安子(卓道会)③遠藤なつみ(加茂農林高)、斎藤瞳(加茂農林高)

【団体戦】▼中学男子①加茂中学校A②葵中学校A③葵中学校B、加茂中学校B▼高校一般男子①加茂卓球

クラブ②卓道会A③加茂高校A、加茂農林高校▼高校一般女子①卓道会

## 第8回市長杯

## 冬鳥越クロスカントリー大会

期日 九月十四日

会場 冬鳥越スキーガーデン特設

周回コース

※参加者六十一名中、五十八名が完走しました。

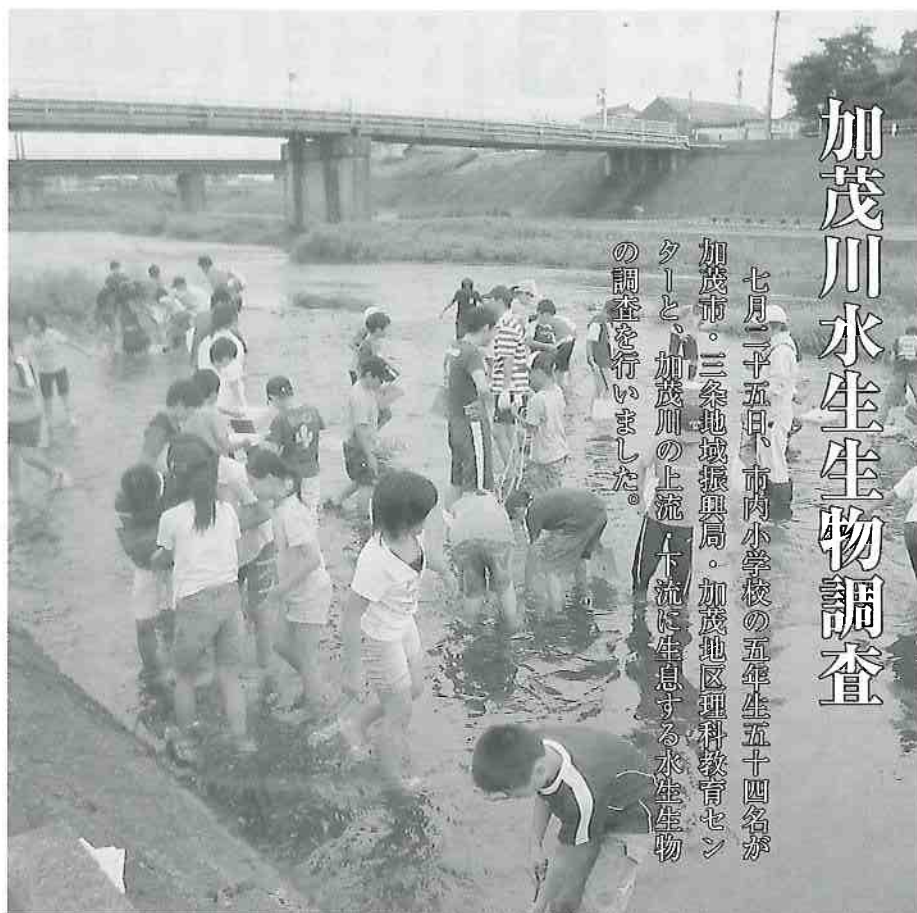
【2周3kmコース】▼小学生男子①梅田聖史郎14分1秒(七谷小)②有本望(石川小)③藤田寛人(加茂南小)▼小学生女子①小野麗奈17分9秒(石川小)②鈴木萌(加茂小)③桑原未帆(加茂小)

【3周4・5kmコース】▼中学生男子①田邊匠22分4秒(葵中)②水信和人(加茂中)③田中悠斗(加茂中)▼中学生女子①立川佳奈25分16秒(五泉北中)②遠藤真実(五泉北中)③佐々木美希(五泉北中)▼壮年男子(40歳以上)①阿部光雄23分42秒(須田小教)②千葉光幸(明和工業株)③梅田良雄(下条走友会)

【4周6kmコース】▼一般高校男子①近藤貴広27分52秒(JAにいがた南蒲)②永井智則(加茂地域消防署)③高橋睦美(清水工業)

# 加茂川水生生物調査

七月二十五日、市内小学校の五年生五十四名が加茂市・三条地域振興局・加茂地区理科教育センターと、加茂川の上流・下流に生息する水生生物の調査を行いました。



川の中には、多くの生物が生息しています。特に川底にいる生物によって、その地点の川の水がどのような状態かを確認することができます。

身近な加茂川での体験学習を通じて、きれいな川の大切さを学んでもらうため、毎年夏休みに市内

の小学五年生を対象に行っています。

この調査により、加茂川にすんでいる水生生物が川の水のきれいさを教えてくれました。

このほかにも、パックテストによる水質判定の実習を行いました。



加茂地区理科教育センター  
専任所員 土佐和久

加茂川水質調査は、加茂市内の小学五年生を対象に、毎年夏休みに入ってすぐに行われている行事です。子供たちの加茂川や環境学習への関心の高さを示すように、毎年多くの子供たちが参加しています。今年は七月二十五日に、五十名を超える子供たちが参加して行われました。

水質調査の方法は様々ありますが、水生生物を使って水質を判定する方法を中心に、毎年行っています。加茂川にすむ水生生物を網ですくい、その中で見られた指標生物（水質のものさしとなる生物）の種類や数によって川のきれいさを判定するというものです。

水質は水質階級ⅠからⅣの四段階に分けて判定します。この方法で、例年と同様に、葵橋付近と水源地

（第一貯水池上流）の二地点で調査を行いました。

はじめに調査を行った葵橋付近では、全体としては水質階級Ⅲの判定ができました。しかし、一方で水質階級Ⅰの指標生物であるヒラタカゲロウや、指標生物ではありませんが、マダラカゲロウのようなきれいな水にすむ生き物も多く見つかりました。

この地点では、きれいな水にすむ生き物も多く見られるように、加茂川は全体としてはきれいな川であると思います。しかし、毎年調査を行っている葵橋付近は、ちょうど生活排水が加茂川に流れ込む地点でもあります。調査地点





# 平成20年度加茂川水生生物調査

H20.7.25

調査場所名		葵橋(下流)	第一貯水池(上流)						
年月日(時刻)		9:20~10:00	10:50~11:30						
天候		曇後雨	曇後晴						
水質	指標生物								
水質階級Ⅰ	1. アミカのなかま		○						
	2. ウズムシのなかま		○						
	3. カワゲラのなかま		○						
	4. サワガニ		○						
	5. ナガレトビゲラのなかま	○	●						
	6. ヒラタカゲロウのなかま	●							
	7. プユのなかま								
	8. ヘビトンボ		●						
	9. ヤマトビゲラのなかま	○	○						
水質階級Ⅱ	1. イシマキガイ		○						
	2. オオシマトビゲラ		○						
	3. カワニナのなかま		●						
	4. ゲンジボタル								
	5. コオニヤンマ	○	○						
	6. コガタシマトビゲラ		○						
	7. スジエビ								
水質階級Ⅲ	8. ヒラタドロムシ								
	9. ヤマトシジミ								
	1. イソコツブムシ								
	2. タイコウチ								
	3. タニシのなかま		○						
	4. ニホンドロソコエビ	○							
	5. ヒルのなかま	●							
	6. ミズカマキリ								
	7. ミズムシ	●							
水質階級Ⅳ	1. アメリカザリガニ								
	2. エラミミズ								
	3. サカマキガイ	○	○						
	4. セスジユスリカ	○							
	5. チョウバエのなかま	○	○						
水質階級の判定	水質階級	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
	1. ○印と●印の個数	3	1	3	3	7	5	1	2
	2. ●印の個数	1	0	2	0	2	1	0	0
	3. 合計(1欄+2欄)	4	1	5	3	9	6	1	2
	その地点の水質階級	Ⅲ				Ⅰ			

○：出現した生物 ●：特に多かった生物

がこのような特殊な場所であることが、水質階級Ⅲという結果に結びついているのではないかと考えます。

次に、バスで上流へ移動し、水源(第一貯水池上流)で調査を行いました。ここでは、ヘビトンボなどきれいな水にすむ指標生物がたいへん多く見られ、水質階級Ⅰという判定結果でした。また、生き物の種類も多様で、指標生物ではありませんがカジカなどの魚や、最近数が減少し、新潟県の準絶滅危惧種に指定されているスナヤツメやコオイムシなど、普段は

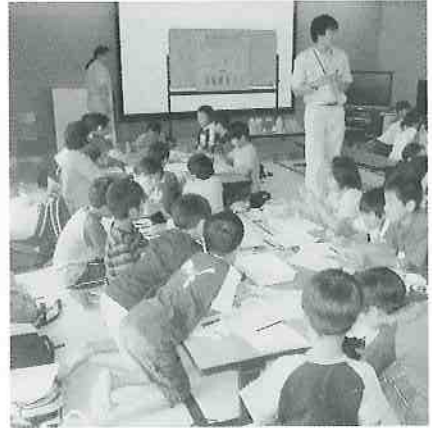
## 川をきれいに

加茂川水質調査の目的は、きれいな加茂川を守っていかうとする子供を、もっと言えば、ふるさと加茂を愛する子供を育てることにあります。私は考えています。その第一歩は「加茂川について知るこ

子供たちが目にするのではない生き物がたくさん見つかりました。これらの結果から、加茂川には貴重な自然が多く残っていることを子供たちも実感した様子でした。

と」にあると思います。今回の調査で、加茂川は様々な生き物が生息しているすばらしい川であることや、川を汚す原因の一つが自分たちの出す生活排水であることなど、加茂川やその環境について今まで知らなかったことを子供たちは知り、ふるさとの川について大きな関心をもったようでした。そしてきれいな加茂川を守っていかうとする気持ちを更に高めたことと思います。

この加茂川の水質調査をきっかけに、ふるさと加茂を愛し、未来に加茂を支える子供が育っていくことを願ってやみません。



# 国指定特別天然記念物

## ニホンカモシカ

加茂文化会館入り口のロビーに、国が指定した特別天然記念物のカモシカの剥製がガラスケースに納められ展示されている。昭和五十六年（一九八一）五月に、市内在住の林隆昌さんが宮寄上の仙見川上流柴倉沢で残雪の中から見つけたもので、十三歳くらいのオスである。

カモシカは、ウシ科カモシカ属に分類される日本特産の哺乳動物で和名をニホンカモシカという。アオシシ、アオシカなどとも呼ばれたヤギの仲間。主に山地に生息し、木の葉や枝の先を摘み取るように引きちぎって食べる。このような食べ方をするのは、上あごの門歯と犬歯がないためだが、進化の面から原始的な形態を残す貴重な動物とされる。

## 加茂の風土記

通常一頭か親子単位で行動し、群れはつくらない。年に一回一頭しか出産せず繁殖力は



文化会館に展示しているニホンカモシカの剥製

強くない。昔から食用や毛皮用、あるいは長い毛は敷物用の毛氈の原料として山村民により捕獲されてきた。かつては広く全国の山地に生息したが、明治以降、乱獲と山林開発により、その数が急減。国は昭和九年（一九三四）に天然記念物に指定して保護を図った。しかし、その後も減り続けたため、昭和三十年（一九五五）に地域を限定しない特別天然記念物に格上げ、規制を強化した。また、昭和四十九年（一九七四）三

条市笠堀ダム上流が全国唯一の地域指定を受けた。

こうした保護策によって生息数は、昭和三十年代の約三千頭が昭和五十三年（一九七八）の環境庁の調査では約七万五千頭に回復し、現在では十萬頭を超えたと推計されている。四国や九州では絶滅に近いとされる一方、東日本では増加が著しく、山奥から里山に生息範囲が広がり、山村の農林業での被害も生じている。加茂市での生息区域は、今まで主に粟ヶ岳・宝蔵山・白山周辺の奥地の山であった。しかし、近年様子が違ってきている。平成十一年以降、市の教育委員会に届け出されたカモシカの死体は七体で、発見場所は宮寄上浄水場、小乙川上流、上高柳、下高柳など、いずれも里山地帯である。加茂市での生息範囲も東日本各地と同様、奥地の山岳地帯から人家に近い所に広がっていることが考えられる。

ところで、細く長い美しい脚を「カモシカのような脚」と形容するが、ニホンカモシカは脚も首も太くずんぐりしている。この例えは、インドやアフリカに生息する羚羊と混同したためによるといわれている。

（長谷川昭一）

あいち

### 社会福祉費寄付金

▼故・藤井キンさん（大郷町一）

のご遺族から 十萬円

▼故・田浦リエさん（中大谷）のご遺族から 二十萬円

▼加茂市民ゴルフ大会実行委員会から 十六萬四千五百六十円

衛生費寄付金

▼緑水工業株式会社加茂事業所から 一萬円

ふるさと寄付金

▼神宮孝一さん（東京都練馬区）から 百萬元

### 人口のうごき

9月1日現在

世帯 10,070（+ 3）

人口 31,451（-12）

男 15,207（- 3）

女 16,244（- 9）

（ ）内は前月比

（8月異動分）

出生 21（男10 女11）

死亡 34（男16 女18）

転出 39 転入 40